

エコエコ 北海道

Ecology of Hokkaido

環境科学研究センターニュース 第57号 2019

特集 アライグマを取り巻く問題



よく間違われるアライグマ(上)とタヌキ(下)



トウモロコシ畑に張られた電気柵とその外側にいるアライグマ



家屋の壁の中で断熱材を引きずり出した隙間で育てられていた3頭のアライグマの幼獣

特集

アライグマを取り巻く問題

■アライグマはどんな動物？■

アライグマという動物をご存じですか？アライグマは、アメリカやカナダ、メキシコに生息するアライグマ科の哺乳類ですが、今や日本全国で分布が拡大している外来種です。大きさはタヌキやキツネ（イヌ科）と同じくらい、よくタヌキと見間違えられますが、アライグマは縞模様の尾、黒い鼻筋、猫背、そして足跡をみると小さな人間の手形のような五本指が特徴です（図1、2）。

また、タヌキは手足や耳のふちが黒っぽいのに対しアライグマは白っぽいことでも区別できます。



図1 トウモロコシ畑に侵入するアライグマ



図2 左側の足跡がアライグマ、右側の足跡がタヌキのもの（指さし先付近）。アライグマの足跡はよつきりと伸びた5本指が特徴

■そもそも外来種とは？■

外来種は他の地域から人間の手によって、本来生息していない地域へ持ち込まれた生物です。

日本では「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」、通称「外来生物法」が制定されています。この法律では外来種の中でも特に生態系や人間の生命・身体、農林水産業に被害をもたらす、またはもたらす可能性のある生物を「特定外来生物」に指定しており、その運搬や飼育、輸入を禁止しています。また、許可を受けて飼育する場合であっても野外へ放すことや許可を持たない人間に譲渡することが禁止されています。アライグマはこの特定外来生物に指定されています。

(参考：環境省「外来生物法」に関するページ

<https://www.env.go.jp/nature/intro/1law/index.html>)

■アライグマの野生化■

アライグマは、1970年代以降、アニメの影響やその可愛い見た目などからペットとして流行しました。しかし、成長するにつれて気性が荒くなって扱うことが難しくなるため、野外に放される事例が後を絶たず、また、手先が器用で身体能力が高いことから飼育場所から脱走してしまうこともあったようです。このようなアライグマが野生化し、日本の環境に適応して、その数が増加しています。

■アライグマを取り巻く問題■

① 生態系への被害

アライグマは雑食性で両生類や昆虫などの動物質のものから果実などの植物質のものまで、幅広い食物を食べます。そのため、同じ餌を食べる在来の生物との餌の競争が起きることが懸念されています。他にもアライグマの捕食によってカエルなどの在来種の数が増えることや在来種が出産や産卵のために利用している場所を攪乱することで、間接的に在来種の個体数を減少させるような影響を与えてしまうことも懸念されています。

② 農業被害

アライグマによる農作物の被害が近年顕著になっています。特にスイートコーンやスイカなどの被害が多く、良く実ったところを見計らって食べにやってきます(図3)。



図3 アライグマによるトウモロコシ被害。
爪で皮が細く裂かれているのが特徴

③ 家屋侵入

アライグマは4～6月の出産期や寒さの厳しい冬に樹洞などを利用することが知られていますが、加えて古い木造建築物や民家の屋根裏、壁の隙間を利用することもあります。侵入された家屋では柱等への傷(図4)や糞尿等による汚染(図5)、ひどい場合は天井が抜けてしまう等の被害が報告されています。



図4 (a)アライグマが建物に侵入した際の爪痕が、柱や壁に残っている。(b)(a)の柱に刻まれた爪痕の模式図

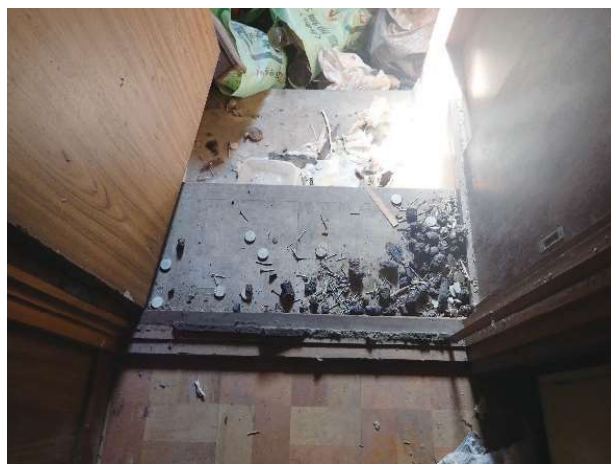


図5 農作業の休憩場所として利用されていた空き家は春に中を覗くとアライグマの糞だらけだった

④ 感染症

アライグマは様々な病気を媒介することが知られています。現状では道内での感染事例はありませんが、道外では動物園での飼育個体からアライグマ回虫、捕獲個体からアライグマ糞線虫といった国外の感染症の病原体が見つっています。道内でも新興感染症ではないものの、捕獲個体からレプトスピラ症やネコが保有することで知られるトキソプラズマといった感染症の病原体が見ついているので、アライグマやその糞尿に直接に触れないことが重要です。

■今後の取り組み■

北海道におけるアライグマによる被害の対策ニーズは年々高まってきています。私たち環境科学研究センターでは、令和元年(2019年)度から「アライグマ防除に係る地域戦略策定のための研究」という課題に取り組んでおり、アライグマの生息状況や、農業被害の現状把握、その対策についての調査研究を行っています。

得られた情報やデータを着実に蓄積し、実態を把握していくことで、全道一丸となったアライグマ対策に必要な知見を洗い出し、より効果的な対策技術の開発につなげていきたいと考えています。

(自然環境部 山口沙耶)

よもやま話

■これも外来植物?■

生態系に被害を及ぼすとして、国の外来生物法で特定外来生物に指定されたオオハンゴンソウの駆除活動が話題になり、また空き地を占領するオオアワダチソウやセイタカアワダチソウが外来植物であることを知っている人は多いと思います。しかし、公園や空き地、道端で普通に見かける草花もその多くが外来植物です。名前に“セイヨウ”とつくセイヨウタンポポやセイヨウオオバコはもちろん、ヒメジョオン(図1)やエゾノギシギシ、ヘラオオバコは、明治時代に北海道に持ち込まれた古い外来植物です。マメ科のシロツメクサやアカツメクサ、シナガワハギ、花粉症の原因になっているイネ科のカモガヤ(オーチャードグラス)やオオアワガエリ(チモシー)は、輸入された牧草が野生化しました。子供のころにセーターにくっつけて遊んだ“ひつつき虫”は、戦後に持ち込まれたオオオナモミやアメリカセンダングサの実です。アワダチソウやシナガワハギの仲間と同様、空き地の常連、フランスギク、メマツヨイグサ、タンポポモドキ(ブタナ;図1)、コウリンタンポポ、アメリカオニアザミも全て外来植物です。畑の畔は春になるとオオイヌノフグリやヒメオドリコソウ、ワスレナグサといった外来植物の花で埋め尽くされます。

あまりにも身近になってしまった外来植物。在来植物が生育していた自然が開発され、外来植物にとって定着しやすい条件の場所が増えたことが、外来植物が増えた原因の一つです(図2)。このような外来植物ですが、在来植物が少なくなってしまった都市や農村では、外来植物の花がハナバチやハナアブ、チョウなどに蜜や花粉を提供する役割を担っているという一面もあります。



図1 ヒメジョオン(左)とタンポポモドキ(右)



図2 オオハンゴンソウ、ヒメジョオン、ムラサキツメクサなど外来植物が繁茂する耕作放棄地

(参考:北海道ブルーリスト2010

http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/alien/bluelist/bluelist_top.htm)

(自然環境部 西川洋子)

情報コーナー

■2019サイエンスパーク■

子どもたちに科学を体験してもらう『2019サイエンスパーク』(主催:北海道・道総研)が7月30日、地下歩行空間と道庁赤れんが庁舎で開催されました。

環境科学研究センターは、身近にみられる外来生物のことを楽しく学んでもらう展示コーナー「知っている!?北海道の外来生物」を出展しました。当日は夏休み中の小学生など多くの方々から外来生物に関するパネル、展示物をご覧いただき、外来生物に関する理解をしていただきました。

☆☆ホームページも御覧ください!!☆☆

<http://www.hro.or.jp/list/environmental/research/ies/index.html>

お問い合わせは

〒060-0819 札幌市北区北19条西12丁目
地方独立行政法人北海道立総合研究機構
環境・地質研究本部 企画調整部企画課
TEL 011-747-3521 FAX 011-747-3254
E-mail ies@hro.or.jp

令和元年(2019年)10月
センターニュース編集委員会